

平成23年 8月17日

各報道機関 様

次のとおり資料提供しますのでよろしくお願ひします。

行 事 等	三笠フットパスの開催について
実 施 日	平成23年8月27日(土) ※雨天決行 13:00~16:00 (スタート時刻は14:00まで)
場 所	三笠市幾春別地区 (スタート&ゴール地点 三笠市立博物館)
内 容	<p>〈趣旨・目的〉 空知産炭地域の活性化を図るため、平成20年度に策定した「元気そらち!産炭地域活性化戦略」の取組の一環として、三笠市を舞台に、この地域特有の炭鉱、地質及び鉄道などの『炭鉱(やま)の記憶』を巡るフットパスを実施します。</p> <p>〈事業概要〉 マップに示されたルートに参加者が主体的に自由に巡るセルフガイド方式によるフットパス(奔別立坑コース、錦立坑コース 各3km程度) ○三笠市立博物館において、コースの見所についてのレクチャー ※解説員 博物館学芸員、市民団体 ○奔別立坑、錦立坑において現地ガイド ※ガイド みかさ炭鉱の記憶再生塾 NPO法人炭鉱の記憶推進事業団</p> <p>〈その他〉 岩見沢~三笠間の無料送迎バスを運行 12時/そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター(岩見沢市1条西4)前に集合 16時/三笠市立博物館を出発し、マネジメントセンターまで ※無料送迎バスは電話で予約が必要で、先着順に受付いたします。 電話受付先/そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター TEL 0126-24-9901</p>
参 考 (経緯など)	そらち『炭鉱(やま)の記憶』で地域づくり推進会議ガイドマニュアル専門部会の事業として実施。 昨年度は赤平市において、元炭鉱マンによるガイド付きの『炭鉱(やま)の記憶』を巡る赤平フットパスを実施した。
取材(報道)にあたってのお願い	三笠市にある『炭鉱(やま)の記憶』の魅力を広く多くの方にアピールするため、事前の周知及び当日の取材をお願いいたします。
担 当	空知総合振興局地域政策課主査(産炭地振興) 担当:主任 田原 (電話0126-20-0034)

— かつての炭都
三笠・幾春別 —

この地の産業遺産・地質遺産を
歩いて巡ってみませんか…

Footpath in Mikasa

三笠 フット パス

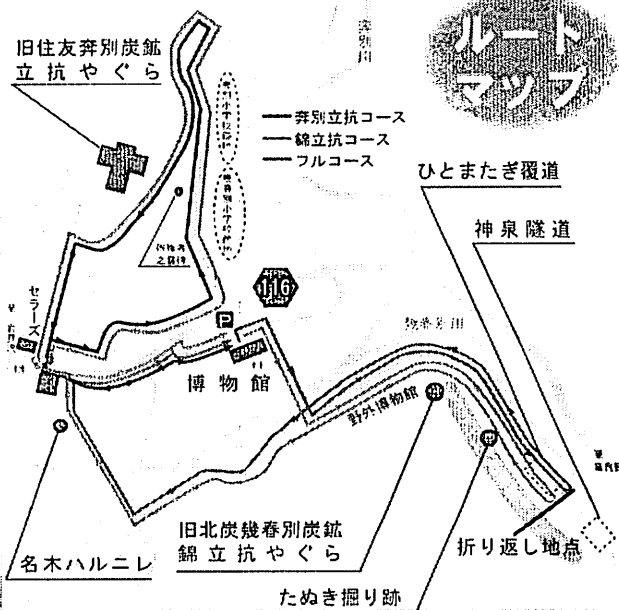


旧住友炭別立抗やぐら

8月27日

開催時間 午後1時～午後4時、雨天決行
 ※受付時間 午後12時15分～午後2時
 スタート・ゴール
 三笠市立博物館

- 集合場所 三笠市立博物館
住所 三笠市幾春別錦町1-212
※駐車場あり
- コース 奔別立抗コース
～炭鉱街のなごりをたどる～
錦立抗コース
～地質遺産と産業遺産をたどる～
※各コースとも約3km
- 参加費 参加無料
- 申し込み 申し込み不要、現地集合
- 主催 北海道空知総合振興局
- 協力 三笠市、みかさ炭鉱の記憶再生塾、
NPO法人炭鉱の記憶推進事業団



【問合先】 北海道空知総合振興局地域政策課 TEL 0126-20-0034

北炭幾春別鉱

石炭発見は古く、1873(明治6)年、ライマンや榎本武揚の調査によって発見されている。1879(明治12)年開鉱の幌内炭鉱に続いて、1885(明治18)年に政府によって開発に着手されたが出炭に至らなかった。1889(明治22)年、幌内炭鉱・幌内鉄道の払い下げを受けた北海道炭鉱鉄道会社(=後の北海道炭鉱汽船株)によって、幌内太(三笠)から幾春別までの鉄道が延長され本格採炭が開始された。

小規模坑口が多く開坑されたが、1933(大正8)年の錦立坑開削によって、生産は次第に同坑へと集約された。

小規模な一般炭やママであることや、炭層が急傾斜で比較的薄いことなどから、たびたび生産体制の見直しや坑道を維持して休止する「保坑」措置がとられた。1953(昭和28)の炭界不況により採炭が中止され、1954(昭和29)には自然発火で坑道水封、1957(昭和32)年に閉山した。

累計出炭量は、6,473,867tであった。

住友奔別鉱(弥生鉱)

石炭の発見は1880(明治13)年で、1900(明治33)年に奈良炭鉱として初めて開鉱した。1906(明治39)年に山縣勇三郎に譲渡され規模拡大が図られたが、1907(明治40)年に日露戦争直後の経済騒乱によって倒産した。その後の経営権は、1918(大正7)年に山下鉱業株(=山下汽船系列)に、次いで1928(昭和3)年に住友へ経営が移った。

住友は、もともと別子銅山の経営で資本蓄積を図ってきたが、他の財閥に比べて石炭進出が遅れていた。三笠市内の唐松炭鉱によって北海道進出を果たしたが稼働条件に恵まれず、すでにめぼしい鉱区は他社に押さえられていた中で、買収による鉱区を獲得するしかなかった。このような背景の中で、奔別は最も期待された鉱区であった。住友の経営に移ってからは積極投資で生産増強を図り、1945(昭和20)年には隣接する弥生地区の東邦鉱業弥生鉱を買収した。

1960(昭和35)年に深部区域を総合開発するため、ドイツGHH社から技術導入(製造は三菱造船株)した奔別立坑、弥生鉱との間の運搬連絡坑道が稼働し、重装備機械採炭の導入によって能率は飛躍的に向上した。

しかし、能率の向上による急激な深部移行は坑内労働条件の悪化(特に高温高湿)をもたらし、従業員が続々と退職する事態となった。これを分社化によって乗り切ろうとしたが、僚山の住友歌志内鉱で大規模災害が発生し、住友赤平鉱への集中化で危機を乗り切ろうという経営判断から、立坑開発からわずか11年の1971(昭和46)年に閉山した。

累計出炭量は、26,510,105tであった。

幾春別・奔別地区は、幌内地区とともに、三笠市の石炭生産で両輪の一つとして活躍してきたエリアです。

北海道で最古の近代炭鉱である幌内炭鉱に次いで幾春別炭鉱が開発されたことから、この地区の歴史は古く、1889年には早くも鉄道が開通し、一定の市街地形成が見られています。その後、1900年代に入ると奔別炭鉱も開坑され、このエリアの発展の基礎がつけられます。

北炭と住友が入り交じった独特の空間である幾春別市街地は、炭鉱とともに大いに発展し、岩見沢から飲みにくる人が絶えなかったと伝わっています。またここは、北海盆歌発祥の地でもあり、戦後の生協運動が全道に広がる基となった地でもあります。

ここには、今でも多くの炭鉱の記憶が残っており、札幌~富良野間の最短ルート上に位置することから、訪問も容易です。

注意！ 事前に必ずお読み下さい

記載した内容は、2011年7月現在の状況をもとにしています。その後、施設の存廃や営業内容・時間の変更など、記載内容が変化している場合もありますので、利用前にご自身でご確認下さい。

炭鉱遺産は、多くが企業・個人の所有となっており、私有地内に勝手に立ち入らないで下さい。また、炭鉱住宅など生活の中にある炭鉱遺産では、住民に一声かけて撮影・見学の見学を許可を得るなど、節度を持った見学をお願いします。炭鉱遺産には、管理されずに自然崩壊に任せている危険な物件も多くあります。また、野生鳥獣や害虫も多く出没する一帯ですので、危険な場所のみだりに立ち入らないように注意して下さい。このパンフレット見ながら現地を回った際に、人身・物件などに損害を被っても、当NPOは一切の責任は負いかねますので、自己責任によって行動して下さい。

C02

幾春別・奔別

IKUSYUNBETSU / PONBETSU



炭鉱の記憶 その先マップ

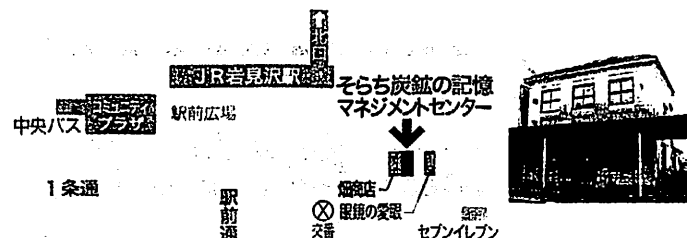
炭鉱の記憶推進事業団

そらち 炭鉱の記憶マネジメントセンター

〒068-0021 岩見沢市1条西4丁目3

TEL:0126-24-9901 FAX:0126-24-9902 infomc@soratan.com

火曜日休み 4~10月/10:00~18:00 11~3月/11:00~17:00



炭鉱の記憶推進事業団